

# 平成26年度成果報告書

## I. 業務の内容

### 1. 業務の題目

基礎調査「つくる」科学コミュニケーションに関する基礎調査 ～社会に開かれた科学技術ガバナンスのためのコミュニケーション活動の現状と今後の可能性を探る～

### 2. 担当フェロー

平川 秀幸  
関谷 翔（アソシエイトフェロー）  
田原 敬一郎（アソシエイトフェロー）  
吉田 省子（アソシエイトフェロー）

### 3. 当該年度における成果

#### ① 対話的方法論のシステム整備

##### a. 科学コミュニケーションの分類枠組みの考案

対話的方法論のシステム整備の一環として、2013年度に考案した「リスク問題・リスクコミュニケーションの複合的分類枠組み」を発展解釈することにより、「科学コミュニケーションの分類枠組み」を考案した。

##### b. 対話的方法論及び対話成果を蓄積するオンラインシステムの構築

対話的方法論のシステム整備の一環として、対話の成果を蓄積し、他の対話の場で活用したり、分析することで科学技術と社会に関する人々の潜在的な問題関心やニーズ、期待や懸念を可視化したりすることに役立てるため、対話成果の蓄積・公開が可能なオンラインシステム「OUR SCIENCES」の開発・運用を始めた。

海外に向けた情報発信として、2013年度に始めた参加型手法と実践事例のデータベース「でこなび」における事例集の英訳をさらに進めた。

#### ② マルチステークホルダーによる対話の実践

課題の可視化、解決策の模索を目的として、以下のマルチステークホルダーによる対話を実践した。対話の手法や成果に関しては、上記のオンラインシステムに蓄積されている。

具体的には、サイエンスアゴラ 2014 にて、ワークショップ「対話する挑戦！～政策実務家・研究者×ワークショップ専門家～」を開催し、イノベーションからレギュレーションまで様々な文脈で行われている対話活動の実践者とのネットワークを広げた。

【日時】2014年11月9日（日）10:30～14:30

【会場】日本科学未来館 7階会議室 3

【参加者数】約 30 名（科学コミュニケーション（対話）実践者、行政官、科学コミュニケーション研究者、など）

【概要】科学技術に関わる複雑な社会問題に、ワークショップの専門家はいかに応えることができるか？様々な関与者の「対話」によって、何が解決され、またはされないのか？科学技術イノベーション政策の実務家からの問題提起に、多様なバックグラウンドを持つワークショップの専門家が実務家と協働して解決策等を模索するワークショップを設計、運営した。

また JST-RISTEX と連携し「評価項目等検討のための RISTEX 内検討会」を開催した。

【日時】2014年11月6日及び12月12日

【会場】JST 東京本部

【参加者】約 30 名

【概要】社会実装や実装支援の在り方について検討し、RISTEX の目標や領域・プログラム等の位置づけ・役割をより明確化すること、そして、領域・プログラムの設計や評価、RISTEX の中期計画の策定に活かすことを目的に、センター長以下 RISTEX 内の関係者を対象としたワークショップを設計、運営した。

さらに、「BSE マルチステークホルダー対話 in 東京～BSE リスクコミュニケーション（2004～2013）とは何だったのか～」を開催した。

【日時】2015 年 1 月 24 日 10:30～16:30

【会場】JST 東京本部 4 階会議室

【参加者】約 30 名

【概要】BSE 対策が大きく変更され 1 年半が経過したいま、この 10 年間に様々な形で行われた「BSE リスクコミュニケーション（知識が不確実で、ステークホルダーが多い問題）」を各自の視点で振り返ることにより、過去の BSE リスクコミュニケーションが抱えていた問題の諸相を顕にし、将来の BSE リスクコミュニケーションにつながる論点の共有と将来的課題を検討した。

### ③ 「3.11 以降のリスクコミュニケーション教訓集」の作成

#### a. 市民等対象のリスクコミュニケーション意識調査

「3.11 以降のリスクコミュニケーション教訓集」の作成に向けた活動の一環として、2014 年 7 月 6 日～7 日にかけて、NPO 法人 ICA-Japan とともに福島県南相馬市浪江町などを訪問し、仮設住宅に暮らす方々などとの意見交換を行った。これにより、2013 年度までに行った関係者ヒアリングとリスクコミュニケーション事例調査の対象を拡大し、市民（被災当事者含む）や NPO などの視点を導入した。

#### b. リスクコミュニケーション専門学会関係者との交流

日本リスク研究学会と共同研究協定を結び、文部科学省「リスクコミュニケーションのモデル形成事業」と連携して、ワークショップ「「リスク」を社会に根づかせる～研究と実践の未来～」を開催した。

【日時】2014 年 9 月 10 日 13:30～17:30

【会場】日本科学未来館 7 階イノベーションホール

【参加者】約 30 名（大学、独立行政法人などのリスク研究者、行政官など）

【概要】以下の論点について、参加者間で意見出しをおこない、論点共有を図った。

- ・リスク評価・リスク管理・リスクコミュニケーションが適切におこなわれている社会とはどのようなものか
- ・その社会を実現させるためには、どのような研究・実践（あるいはタスクグループ）が必要となるか、また、それぞれの研究・実践間でどのような連携が求められるか
- ・それぞれの研究・実践（あるいはタスクグループ）では具体的にどのような課題にどのような手法でアプローチするか

また、「リスクコミュニケーション研究及び実践の現状に関する分野横断的調査」（別紙）を実施した。

さらに、第 27 回日本リスク研究学会本会において、ワークショップ※「これからのリスク教育プログラムを考えよう」（11/28）及び企画セッション「リスクコミュニケーションの現場から～身近な市民とのかかわり～」（11/29）を開催した。

※【日時】2014 年 11 月 28 日 18:30～20:30

【会場】京都大学吉田キャンパス構内

【参加者】約 20 名（日本リスク研究学会員、科学コミュニケーションセンターアソシエイトフェロー）

【概要】2014 年 9 月 10 日に開催したワークショップ「「リスク」を社会に根づかせる～研究と実践の未来～」で出たアイディアの中でも特に、リスク教育に関連するものに

絞って、前回参加できなかった方々にも参加していただき、これからのリスク教育プログラムを検討した。

④ 「つくる」コミュニケーション活動に関する研究会・意見交換会の開催

「つくる」コミュニケーション活動の現状把握と課題特定の一環として、研究会・意見交換会を開催した。

具体的には、2014年4月8日から7月15日にかけて、科学技術社会論（STS）やその関連分野の成り立ち、基本的な考え方、これまでの議論展開、現在の到達点等に関する理解を深めるための勉強会を開催した。

また2014年11月18日にセミナー「民主主義における専門性の問題：福島原発事故自主避難者賠償問題を例にとりて」を開催した。本セミナーは、「専門性の民主化／民主制の専門化」に関連する「つくる」コミュニケーション活動の現状の把握及び今後の課題を特定に寄与するものとなった。

さらに、CSC 田中ユニットと連携し「科学技術コミュニケーションの現状と展望に関する意見交換会—STS の視点から—」を開催し、科学コミュニケーションセンターの活動に対して助言できるアドバイザー・ボードについて検討を行った。連携して実施することにより、参加者のスコープを広げることができた。

【日時】2014年8月1日

【場所】JST 東京本部別館

【参加者】約20名（科学技術社会論学会員、科学コミュニケーションセンターフェロー等）

【概要】科学技術・イノベーションのガバナンスにおけるコミュニケーションのあり方に関して、科学技術社会論の若手・中堅研究者等による科学コミュニケーションの現状と展望に関する意見交換を行った。

⑤ 海外調査

「つくる」コミュニケーション活動の現状把握と課題特定の一環として、2014年11月19日～21日、ローマにて開催された国際会議「Science, Innovation and Society: Achieving Responsible Research and Innovation (SIS-RRi)」に平川フェローが出席し、調査を行った。